

ぜひ一度

お子さまを連れて

自身を律し、他者を尊重



子供たちを熱心に指導する石川遼(左)

教えてほしいゴルフの精神

ゴルフ界の舞台裏
はた
告マン
最終回
篠原一郎



トーナメント会場へ

れ、また見られるスポーツだった。将来プロゴルフファーになりたい、と卒業文集に書く同級生など、学年に一人もいなかった。

ところが子供にいいのかわからない、まず正直に自分の打数を申告し、ミスを見ても見えてもいなくても、自分でペナルティと申し出る点だ。次に、観客も選手も、ほかの選手が不利になるような言動を決してしない、という点も新たに認識させられた。

また、トーナメント会場では、手を伸ばせば触れられるような場所に選手がいて、ホールアウト後に並んでいればサインをしてもらえる。金網越しでしか選手を見られないスポーツではない点も強調しておきたい。テレビ観戦しかしたことのない人には、一度、お子さまを連れて来てもらいたいものだ。

選手が間近に

また、トーナメント会場では、手を伸ばせば触れられるような場所に選手がいて、ホールアウト後に並んでいればサインをしてもらえる。金網越しでしか選手を見られないスポーツではない点も強調しておきたい。テレビ観戦しかしたことのない人には、一度、お子さまを連れて来てもらいたいものだ。

ゴルフで選手に不利な裁定が出たとき、不服を言うケースが欧米でもないわけではない。だが、多くの選手は紳士的に受け入れる。ときには決定的な場面で「ボールが動いた」、「スイングのとき、自分のクラブが触れてはいけないものに触れてしまったようなのでビデオで確認してくれ」と自ら申し出てペナルティを科され、みすみす優勝を逃す事例もある。

ゴルフ担当になる前は、同伴競技者のパッティングラインを踏まないようにする程度は知っていたが、いつもほかの選手が最高のパフォーマンスができるように最大限の配慮をするのがゴルフだ。多くの競技では、選手も観客も相手サイドの選手がいやがるような言動を躊躇(ちゅうちゅう)しない。

ただし、第3回に書いたけれども、それぞれのスポーツにはそれぞれの興味と奥深さがあり、そ

しておきがある。

以前、プロ野球で落球がビデオで映っているのに審判が見逃し、選手も何も言わなかったことがあった。ゴルフ界なら落球としました」と言うけれども、こういう事例を野球では学生レベルでも聞いたことがない。野球はそれでよいのだと思う。

スポーツ発展を

私自身も、観客や味方の監督に「へたくそ」やめてしまえ」という声をインプレー中に浴びせられたことが何度もある。それが野球だと私は思っている。ゴルフに触れた後も、もし自分があの二塁手なら「落とした」とは言わない。サッカーだって、相手が不利にならないようになど言っているのは試合にならない。それぞれのスポーツの発展を祈って筆を置く。

STORY

篠原一郎(しのはら・いちろう) 1959年8月20日、愛媛県出身。松山東高校から東京大学経済学部へ進む。いずれも野球部に所属。84年、電通に入社してテレビ局、ロサンゼルス勤務などを経て98年スポーツ事業局、06年から電通スポーツパートナーズに出向、ゴルフ業務部長。